

といへり、これはちひさくつくれるを鳥のひなになすらへていへる名にて、字も雛とかき、今の世の人もひなといふをふるくひゐなとしもいへるは、詩歌をまいか、四時をまいじ、女房をにようばうといふたぐひにて、ひもじを引ていふなれば、假字はひいなと書べきを、ゐと書るはたがへり、物の雛形といふも、ちひさく物したるよしの名なり。

〔骨董集 上編 下前〕雛の假字の事 契沖雜記に、ひ、は、ひ、と聞ゆることゑ、なは、鳴かといへり、古言

梯も此説によれるにや、鳥の子のひ、と鳴音もて名づくるなるべしといへり、又或説に、宇津保

物語藤原君の卷に、巢をいで、ねぐらもまらぬひな鳥もなぞやくれゆくひよとなくらん、とあるに

て、ひよとも、ひ、ともなくものゆゑに、ひ、なといふことわりまらるといへり、玉かつま十卷の説

は、これらにたがへり、ふるくひゐなといへるは、ひもじをひきていふなれば、かなはひいなとか

くべきを、ゐとかけるは、たがへりといへり、おのれ岩瀬此説によりて、まばらくひいなのかな

をもちふれども、釋日本紀卷二比賣那素寐ナソミの釋に引る私記のことばに、比々ヒヒ奈遊ナアソビとあり、江家次

第七卷十立太子の條にも、比々奈とかける古例あれば、ひ、なとかくもわるきにはあらざるべし、

されどひ、と鳴義とさだむるときは、ひ、なは本なり、ひなといふは略言にて、未なるに、鳥の子

を、ひな、ひな鳥などはいへれど、ひ、なと物にかけるを、いまだ見あたらす、ふるきものにも、人形

のたぐひ、すべてちひさくつくれる物のみを、ひ、なとかけるは、未を本とせるに似たり、又人形

のたぐひを、ひなとつゞめていへるも、ふるき物にはすくなしたまへ、齋宮女御集卷下に、ひな社

とあれど、契沖師の校本を見れば、古本には、ひ、なやしろとあるよしにて、ひきなほしたり、又御

堂關白御集のことばがきに、たかまつのきみの御もとより、ひなやまゐらせ給ふとてとあれど、

下の詞がきには、わかみやの御ひ、なやに云々とあれば、上にひなやとあるは、おぼつかなくぞ

おぼゆる、かく未を本にせるにて、ひ、なのかなにもうたがひなきにあらず、又ひ、となく義と